

## テテ : 「Love,love,love」

安藤 はる子

愛知みずほ大学人間科学部人間科学科

今回は、セネガル生まれのシンガー・ソングライター、テテがつくった歌を、ひとつ紹介したい。

(1) 歌詞の紹介

1) フランス語

Love,love,love

”Oh, j'aimerais que quelqu'un  
M'ouvre grand ses bras  
Que je m'y fiche,  
Que je m'y loge,  
Que je m'y niche,  
Que l'on m'ouvre enfin,  
Que je m'y love,love,love

La chair triste m'indiffère,  
Ces jeux-là ne me dissent guère  
Mais nous pourrions causer un brin,  
Histoire de, si tu le veux bien

Les parties d'ça-va-ça-vient,  
La bagatelle, ne me dissent plus rien  
Mais nous pourrions causer un brin,  
Histoire de, si tu le veux bien

Oh, j'aimerais que quelqu'un  
M'ouvre grand ses bras  
Que je m'y glisse,  
Que je m'y niche,  
Que je m'y loge,loge,loge  
Que l'on m'ouvre enfin,  
Que je m'y love,love,love”

C'est ce qui me manque vraiment”  
Se languit-elle ……

2) 日本語試訳 (注1)

Love,love,love

「ああ、誰かが私に  
両手を大きく広げてくれて  
私がそこに身をおき  
私がそこをすみかにし  
私がそこに住みつき  
そしてついに、私の心が開かれ、  
私が自分のことをすきになれたら  
どんなにいいだろう

肉体は悲しいので 私は関心がないわ  
肉体の遊びも 私にはほとんどどうでもいいこと  
でも、もしあなたが望むなら、  
私たちは少しおしゃべりができるかもしれない  
何かのために

人が出たり入ったりの騒々しいパーティや  
色恋なんかも  
私にはもう全く興味がないこと  
でも、もしあなたが望むなら、  
私たちは少しおしゃべりができるかもしれない  
何かのために

ああ、誰かが私に  
両手を大きく広げてくれて  
私がそこに滑り込み  
私がそこをすみかにし  
私がそこに住み、住み、住み  
そしてついに、私の心が開かれ、  
私が自分のことをすきになれたら  
どんなにいいだろう

それが 私に本当に欠けていること」  
と、彼女はこんなふうに深く思い悩んでいるのだった……

## (2) 解説

### 1) テテについて (注2)

テテは、セネガル生まれで、現在はフランスを中心に活躍しているシンガー・ソングライターである。彼は、1975年7月25日、西アフリカのフランスの旧植民地セネガルで生まれた。父親はセネガル人、母親は、カリブ海にうかぶ小アンティル諸島出身である。両親が離婚し、テテは2歳の時に、母とともにフランスへ渡る。

15歳か16歳の頃、母親からギターを贈られたことが、彼が音楽の道へと進むきっかけになったということだ。フランスの北東部に住んでいたテテは、1998年、パリに移り住む。様々な場所でライブを続けながら、2001年には、ファーストアル

バム『レール・ドゥ・リヤン』を発表。2004年、セカンド・アルバム『ア・ラ・ファブール・ドゥ・ロートン』を発表。このアルバムにおさめられているタイトル曲「ア・ラ・ファブール・ドゥ・ロートン」が、NHK テレビのフランス語講座で紹介され、日本でのテテ人気に火をつけた。2006年、サードアルバム『ル・サクル・デ・レミング』を発表。

### 2) 「Love, love, love」およびアルバム『レール・ドゥ・リヤン』について

「Love, love, love」は、ファーストアルバム『レール・ドゥ・リヤン』におさめられている。この曲は、題名とはうらはらに、シンプルなラヴ・ソ

ングでは全くない。自分にいまだ確信が持てない「私」が、自分には欠けている何かとても大切なものを求めようとしている歌である。

テテのこの「Love, love, love」で歌われている世界をより深く理解するために、今回は、『レール・ドゥ・リヤン』におさめられている他の曲の歌詞の世界にも目を向けてみたい。

このアルバムには、「Love, love, love」を含む、13曲のテテのオリジナル曲が入っている。このアルバムは、「最もすばらしい世界」で始まる。この曲では、戦争で荒廃したセネガルから、母と二人、よりよい世界を求めて脱出する様子が歌われている。実際には、テテは2歳でセネガルを離れており、こんなにはっきりとした自分の意志で故国を離れたわけではない。しかし、アルバムの最初はこの曲をもってくることによって、テテは、自分のルーツをはっきりと示していると思う。しかし、たどりついた世界（具体的にはフランス）も、天国ではなく、「Love, love, love」をはじめとするその他の曲では、そこで生きることの様々な困難や苦悩が歌われる。

アルバムのタイトルにもなっている「レール・ドゥ・リヤン（なんでもないふり）」では、小学校の頃のテテが歌われている。まじめでよい子なんかではなく、教師に面倒をかけがちな幼い頃のテテが、コミカルに歌われる。かなり自分が浮いてしまうような環境の中で、つとめて「何でもないふり」をしようと努力する少年の姿がそこにはある。

「いとこのウィリー」では、「ぼくが一番大切なものはぼくの歌。ぼくは、何にもすることがないこんな田舎を出て都会に行きたいんだ」と言い張って、親類の人たちを困らせるウィリーという男の子が歌われている。

「マジシャン」では、生きるかわりに、愛するかわりに、笑うかわりに、少年のようにマジシャンになって、いろんな事や物を自分の手で変えることを夢想する「私」が登場する。この「私」は、自分の頭の中では、勝手に雨を降らしたり、毛虫を蝶に変えたり、悲しみを詩に変えたりできるのだ。

「何でもないふり」や「いとこウィリー」や「マジシャン」は、全体的に、コミカルな雰囲気歌詞になっている。しかし、このアルバムには、かなり暗くて、深刻な内容の歌もある。たとえば、「パサージュ・ブラディ」では、「誰も愛してくれないし、誰も名前も呼んでくれないし、誰も声をかけてくれないし、誰も彼の家に訪ねてきてくれない」男が主人公だ。彼は町をうろつき、とても

みじめで自虐的な生活を送っている。人々にはひどい悪口をいわれ、彼は自分に対してもはや軽蔑しか抱けない。

「災いあれ」には、自分は人々からとても疎外されていると感じている男が出てくる。彼は、(彼には自分を見下げているように感じられる)人々の視線にとっても苦しんでいる。そんな彼は、物質的な豊かさを求めようとはせずに、自分を貧しい状態に置くことによって、自分の感覚を鋭く研ぎ澄ませようとするのだ。

また、「いまわしいハイド」では、ジキルとハイドが登場する。テテが、人間の人格の分裂の問題にも深い関心を持っていることがわかる。

こんな風に、コミカルな内容の歌、かなり深刻な内容の歌と様々だが、どんな歌の中でもテテは、「自分とは一体何者なのか?」「自分は一体何になりたいのか?」「自分はどう生きていきたいのか?」といった「問い」を、つねに自分に投げかけている。

そして、12番目の「欲望」では、自分は長い間、自分の欲望のままに生きることを自分に禁じてきたけれど、自分の思うままに生きようと決心して以来、ぼくの人生は以前よりずっとすてきさという内容が、歌われている。

以上、「Love, love, love」を含むアルバム『レール・ドゥ・リヤン』におさめられている曲の歌詞の世界をいちべつしてきた。アルバム全体を見通してみると、一見わかりにくい「Love, love, love」の歌詞の世界も、一言では説明できない「深さ」を持っていることがわかるのではないだろうか。

これまで、歌詞の世界についてばかり書いてきたが、このアルバムは、テテのギターとヴォーカル、それに、ドラムとベースを中心にして、とてもシンプルでアコースティックな雰囲気に仕上がっている。「Love, love, love」も、歌われている内容はかなり重いけれど、曲はとてもポップで明るい感じに仕上がっており、このアルバムの中でも、人気のある曲のようだ。このアルバムは、フランスでは、若者を中心に、広く受け入れられたとのことだ。

私は今後も、テテの曲をじっくり聞いたり、歌詞を精読したりしながら、彼の創る世界に関心を持ち続けていきたい。

(注)

- 1) テテ『レール・ドゥ・リヤン』のアルバムには、向風三郎氏の訳詞が収録されている。ここでは、向

## 紹介

風三郎氏の日本語訳を参考にさせていただきながら、安藤訳を試みた。

- 2) テテについては、アルバム『レール・ドゥ・リヤン』に収録されている、各務（かがみ）美紀氏と海老原政彦氏の解説と、アルバム『ア・ラ・ファブール・ドゥ・ロートン・』に収められている解説（これには著者名が明記されていない）を参照させていただいた。

### 〈参考 CD・参考文献〉

- 1) テテ『レール・ドゥ・リヤン』(Tété, L'air du rien)、Sony Music Entertainment、2001。
- 2) テテ『ア・ラ・ファブール・ドゥ・ロートン』(Tété, A la faveur de l'automne)、Meta Company Limited、2004。
- 3) テテ『ル・サクル・デ・レミング』(Tété, Le sacre des Lemmings)、Sony BMG Music Entertainment、2006。
- 4) 林 瑞枝『フランスの異邦人』、中公新書、1984。
- 5) 本間圭一『パリの移民・外国人』、高文研、2001。
- 6) 中村弘光『アフリカ現代史Ⅳ（西アフリカ）』、山川出版社、1982。
- 7) 宮治一雄『アフリカ現代史Ⅴ（北アフリカ）』、山川出版社、1978。